



**Kevin Spring**



そらちゃんの羽は、もう完全に水色になっていい頃なのにまだグレーっぽいんです。天気によっては、薄茶色になったりもします。そのことをそらちゃんは、とても気にしているようです。落ち込むようなことがあると、私はまだちゃんとした水色じゃないから、と羽のせいにしてしまうんです。

ある日、そらちゃんは、仕事からの帰り道で、まあい入口をしたアトリという喫茶店を見つけました。入口から見えた店のマダムは色白でずんぐりとしていて、優しそうでした。目が合うと笑いかけてくれました。

「どうぞ。いらっしやいませ」

と言ってマダムはお店のドアをあけました。カウンターがあって、中にはおじさんが物音一つたてずに、カップを拭いていました。おじさんは、なんだか怖そうでしたし、好きな席へどうぞと言われたので、店の一番奥の大きなテーブルのはじっこに座りました。他にお客さんはいないようでした。

おじさんのいれてくれた、ナッツティーは、とってもおいしかったし、なにより居心地が良かったので、ずいぶんゆっくりと過ごしました。外に出ると辺りはすっかり暗くなっていて、店の入口には、灯りが点ってました。

「また来て下さいね」

と、店のマダムが見送ってくれました。

「ごちそうさまでした。とってもおいしかったです」

そらちゃんは、こう言って、マダムとさよならしました。『今日は素敵なお店に出会ってよかったなー』と、帰り道を歩いていました。いつもより遅くなってしまったので、少し速度をあげました。けもの道にさしかかったとき、そらちゃんの近くで、ひゅーと風が吹きました。急に心細くなったそらちゃんは、お昼休みに、家具工房の先輩が話していたことを思い出しました。

「最近、夜になると、大きな口を開けて何でも食べちゃうバケモノが出るのよ。知り合いの友達の友達に聞いたんだけど、私たちよりもずーっと大きな体をしていて、すごくすばしっこいんですって」

そらちゃんは一瞬懸命走りました。すると今度は、反対のほうから風が吹きました。

「きゃあ、怖い。お母さーん」

と、そらちゃんにそっくりな声が聞こえて、思わず立ち止まりました。『え？え？なに？』

「ハーハッハッハー」

それは森林パトローラーのかけすくんの声でした。

「びっくりするじゃない」

「食べられると思ったか？」

とバケモノらしい声で言いました。『かけすくん嫌いっ。いっつも意地悪するんだもん』そらちゃんは、さっきよりももっと早く走りました。

「そーら、そら、急がないとバケモノが追いつちまうよー」

そらちゃんは、恥ずかしさと悔しさで、顔を赤くしながら走って、やっと家に着きました。振り

向いて、

「もう、家までついて来ないで」

と言いましたが、かけすくんは、もう、いなくなっていました。

「ただいま」

「お帰り。…そら、ずいぶん慌てて帰ってきたのね」

「…うん」

そらちゃんはすぐに二階の自分の部屋へ向かいました。『今頃かけすくんは私のこと笑っているんだ。どうしてかけすくんは私のことが嫌いなんだろう？私は、かけすくんが、私のことを嫌っているから、嫌いなんだ。優しくしてくれたら、嫌いにならないのに。私が水色じゃないから？あー、変わりたいなー。つばさちゃんになりたい。かわいくて、優しくて、強い。それから…明るくていつも笑っている。それにひきかえ私は…』

「トン、トン」

「なに？」

「ごはん。お腹空いたでしょう」

「うん、…今行く」

ドアが開きました。

「どうしたの？何かあった？」

「……」

「話してごらん」

そらちゃんは今よりも、もっと小さいこどもの頃、嫌なことがあっても楽しいことがあってもお母さんにみんな話していました。『でも、もう私はいっばしのおとななんだ』

「なんでもないよ」

お母さんが作ってくれるごはんはいつもおいしいけれど、そらちゃんは、お腹いっぱいのおきみに食が進みませんでした。喫茶店アトリのことも話す気になれませんでした。

「ごちそうさま」

そう言って、すぐまた二階へあがっていきました。

家具工房が休みの日に、そらちゃんは、たろう沼に散歩に出かけました。橋の上でぼんやりしていると、声が聞こえました。

「いい天気だな」

それは、たろう沼に住んでいる、ぬまじいの声でした。

「そら、お前さんには太陽がお似合いだな。すごく羽色がいい」

「ぬまじいは、なんでも褒めるね。...本当はそんな風に思っていないくせに」

「いいものはいいと言うだけだ、何でも、じゃないぞ」

ぬまじいは、沼から橋の上へやってきました。

「本当にいい色だよ」

そらちゃんは、その言葉をくすぐったく感じました。

「そら、知っているか？言葉は食べられないが...」

「...？」

「栄養にも毒にもなる」

「褒められたら栄養で、嫌な言葉は毒？」

「うーん、ちょっと違うな。褒められても栄養にならないこともあるし、嫌な言葉が毒になることも限らない」

「どうして？」

「毒にするのも、栄養にするのも、そら次第ということだ。そこが、食べ物とちがうところだな」

ぬまじいは、すごくまじめな顔をしていました。

「それから、毒ににしても慌てることはない。体に長い間ためておかないことが肝心だ」

「...吐き出せばいいの？」

「それも、ある。いろいろ方法はあるんだぞ」

「なんだか、難しいね」

「答えは一つじゃない。決まりもない。ゆっくりやればいいんだよ」

そらちゃんの意識は、いつのまにか毒から栄養に重点が置かれはじめていました。

「うん、やってみるよ、ぬまじい」

翌日、そらちゃんは内心ウキウキしながら家具工房へ向かいました。いつも怒られている先輩にも、なにを言われて、どんな風に栄養にするかを考えると、びくびくしませんでした。失敗しないように、怒られないようにと考えない分、いつもより早くたくさんキレイにネジをしめられました。その日は、一度も怒られませんでした。

その翌日も、また次の日も怒られずにすみました。すると、そらちゃんは、考えるようになりました。『先輩は、私が嫌いだから怒っていたんじゃないかなあ。先輩が怖いから仕事が出来ないって思ってたけど、違うのかもしれない』そらちゃんは、自分ができないのを人のせいにしていた気が付きました。すると自分のことが、とても子供じみていて感じて、はずかしくなりました。帰り道を、沈んだ気持で歩きました。『どうして、こうなんだろう』と落ち込む自分を思って、また落ち込みました。もう、何について落ち込んでいるのかわからなくなるくらいに気分がどんよりとした頃、あの喫茶店の前に来ていました。心も陽もどっぴりと沈み、`アトリ、と書かれた看板に灯されているあかりが、温かに感じました。お店のドアを開けると、あのやさしいマダムはいないようでした。

「いらっしやいませ」

と、おじさんの低い声が聞こえて目が合うと、吸い寄せられるようにカウンターに座りました。後方のボックスシートからにぎやかな笑い声がします。距離はそんなに離れていないのに、まるで、別の空間にいるみたいだとそらちゃんは思いました。所在なさげにもじもじしていると、

「どうぞ」

と湯気の立った飲み物を差し出されました。

「え？あっ、私にですか？...ありがとうございます」

夜の色をしたその香ばしい飲み物は、口にするとほんのりとした甘味があってほっと落ち着くのでした。

「は一あ、おいしい」

と思わず声をもらすと、おじさんの口元がかすかに緩んだようです。二口三口と運ぶと、そらちゃんは、さっきより気持ちが静かになっていると感じられました。『ぬまじいと言っていた、栄養と毒の話は、誰かになにか言われたときのことだけど、誰もなにも言っていないのに、まるで誰かに言われたみたいに、私の中の誰かが言っているようなときはどうするのだろう？そらはダメなやつだって。私の中に居ようが、他人は他人？だとしたら、それは誰？それとも私の中なんだから、私？私かあ...。やっぱり誰もな一人にも言っていないんだ。それなのに...ん？最初に私の中で発言したのは、私の中の誰？だから違うんだってば、私の中だから誰かのふりした私。誰かのふりの誰かは誰？あああ』そらちゃんは、ぐるぐるしはじめて、一時間前あたりから巻き戻して、再生するように考えました。『仕事をしている。このときは、落ち込んでいない。もう少し後だ。先輩が、出来上がった棚をチェックしている。O、Kと言って塗り場へ回す。お疲れ様でした。さあ、帰ろう。あー、今日も怒られなかった。ストップ。...この辺から雲行きがあやしくなっていく気がする。怒られなかった？それが大事なの？怒られないのが当たり前。仕事をしに来ているんでしょう？お母さんに叱られないように振る舞う良い子みたい』とざわざわしはじめて、議長のそらちゃんが、『先輩は、そもそもそらちゃんが嫌いだから怒っていたわけではないのではないか』と発言して、そらちゃんの誰かのふりをしたそらちゃんは、次々にそらちゃんに対する非難の声をあげました。

そらちゃんは思いました。『これは私の中で他人のふりをした私たちが、会議をしたのだ。悪魔がやってきて、耳元で囁いたりもしてなければ、誰かが私に言ったわけでもない。消化に時間がかかっているんだ。それに、発言を全部聞かなくなったっていいんだ。だって全部自分の中のことなんだから』そらちゃんは、もう一度ホットブラックセサミを口にしました。

「おいしい」

その感想に反対するそらちゃんはいませんでした。頭で答えを出そうとするからおかしなことになるんだ。温まったむねでそらちゃんが、今日のところは決を出しました。

朝起きると、雨音が聞こえました。『ああ、雨が鮮やかな青色だったらいいのになあ』とそらちゃんは思いました。雨雲は、そらちゃんの心もどんよりとさせました。出かける前に鏡を見ると、今日の空と同じ色をしていました。家具工房に行くと、そらちゃんは先輩に呼ばれました。何を言われるのだろうかと思構えました。

「そらさん、今日から塗り場へ行きなさい」

そらちゃんは、全然別のことを考えていたので驚きました。

「は、はい」

「頑張ってください」

「はい。ありがとうございます」

『わー。やったあー』そらちゃんは心の中で、そう叫びました。

その日は、新しい事だらけであっという間に時間が過ぎました。工房を出てからも、うれしくてうれしくて、たまりませんでした。ぬまじいのところへ行って話そうかと思ったけれど、まだ、雨が降っているし、まっすぐ家に帰ることにしました。朝よりも雨は激しくなっていたのですが、不思議とあまり濡れずにすみました。そらちゃんは気がついていないけれど、それは誰かさんのおかげだったのです。そらちゃんのお母さんは家の窓からその姿を見ていました。

「かけすくん、あがって行って」

そらちゃんが家に着くと、お母さんがそう言いました。そらちゃんは思いました。『どうしてかけすくんが、いるの？お母さんは、かけすくんのことをよく知らないからこんなこと言っているんだ』

「まあまあ、こんなに濡れちゃって。そら、かけすくんに、入ってもらいなさい」

そう言うお母さんをそらちゃんは、ジロリと睨みましたが、お母さんの気持は変わらないみたいでした。かけすくんは、お母さんの申し出を断って帰ろうとしていましたが、そらちゃんはお母さんにギョッと目線がうながされて、仕方なくこう言いました。

「かけすくん、どうぞ」

お母さんが飲み物を作っている間、そらちゃんとかけすくんは二人っきりになりました。いつも声色を変えてそらちゃんをからかっているかけすくんは、ときどき羽を動かすぐらいでとてもおとなしくしていました。そらちゃんは早くお母さんに話したくてかけすくんには悪いけど、早く帰って欲しいとさえ思っていました。『なにかしゃべってよ、かけすくん』そらちゃんは思いました。それでも、かけすくんは、黙っています。『変だな、かけすくん』そらちゃんは、かけすくんに聞きました。

「具合悪いの？」

「いや」

「そう。ならいいんだ」

かけすくんは、一言でそらちゃんの質問に答えると、また黙ってしまいました。

「かけすくん、何していたの？」

「家に帰るところだった」

『あー、かけすくんの声はこんなだったんだなあ』と、そらちゃんは思いました。

「お待ちどうさま、さあ、かけすくん、どうぞ」

かけすくんは、いただきますと言うと果実ジュースを、黙って飲みました。次にかげすくんの声を聞いたのは、ごちそうさまでしたと言ったときでした。

かけすくんは、お母さんに丁寧にお礼を言って帰っていきました。今日のかげすくんはいつもと全然違った、あんなにおとなしいかけすくんははじめてだ、いつもはあんな感じじゃない、とそらちゃんはお母さんにぴーちく熱弁しました。

「そう？お母さんは、ああ、やっぱりかけすくんは優しいなって思ったわよ」

「えー？かけすくんが、やさしい？」

「そう、とっても、優しい。お母さんはかけすくん大好きよ」

「ええー！...お母さんは、分かってないなあ」

今日は家具工場の支給日です。そらちゃんは仕事が終わるといそいそと喫茶店アトリへ向かいました。『今日はどの席に座ろうかな。何を飲もうかなあ』とそのことで、頭がいっぱいです。アトリのドアを開けると、なんと、カウンターにかけすくんが座っていたのです。そらちゃんは、びっくりして、帰ろうかと思いましたが、そのときふと、お母さんが言っていたことを思い出したのです。

「かけすくんは、とってもやさしい。お母さん大好きよ」

お店のマダムが、

「いらっしやい。どこに座りますか？」

と、そらちゃんに聞きました。

「えー、とお...」

すると、かけすくんもそらちゃんに気がつきました。

「そらじゃないかあ、ここは子供がくるところじゃないぞお」

と笑いました。

「あら、お友達なの？」

とマダムはたずねました。そらちゃんは、こっくりととうなずき、入口に立ったまま、うつむいてしまいました。

「そう、あなたがそらちゃんなの。だめよ、好きな子にわざとそんなこと言って、そらちゃんよりずっと子供よ」

マダムがそう言うと、今度はかけすくんが顔を真っ赤にしたのです。

「そ、そんなことないよ、オレは...そんなんじゃない。そら、いいから早く座れよ」

しどろもどろにそう答えたかけすくんが可笑しくて、そらちゃんは顔をあげて、かけすくんの隣に座りました。

「さっき言ったことは、ホントのことよ」

とマダムが、そらちゃんの耳元でささやきました。

「なにこそこそいっているんだよ。おかあちゃんは余計なこと言わないで仕事仕事」

「え？おかあちゃん？...そうなんですか？」

「はい、かけすの母です。いつも、あなたの話ばかりしているんですよ。あなたがそらちゃんだったなんて、うれしいわ。口は悪いけど悪気はないの、いつもごめんなさいね」

「い、いえ。驚きました、まさか、かけすくんのお母さんだったなんて...」

「ゆっくりして行ってね」

マダムはかけすくんに追い払われるようにして歌をうたいながら奥のキッチンに入って行きました。

「この間は...、そのお...邪魔したな」

「ううん。うちのお母さんは...、かけすくんが大好きなんだって」

「お母さんは、か...」

「え？」

「あれだな、なんか...、こう、いい天気だな」

「う、うん...そうかな...」

そらちゃんは、小窓から外を見ますが、くもっています。今日は朝からずーっと曇り空です。かけすくんはどうやら緊張しているみたいです。

「オレのことは、あれだけど...、店にはまた来てやってよ。かあちゃん喜ぶからさ」

「うん。来るよ。私、このお店とっても好きよ」

「...店、か...」

「え？」

そらちゃんは、少しかけすくんを見直しました。『意外とお母さんおもいなんだなあ』と。

「はい、おまちどうさま。これは、私から。よかったら食べてね」

と、お茶と一緒にケーキも持ってきてくれました。

「わあ、おいしそう、ありがとうございます」

「どういたしまして。かけす、もう、告白したの？」

「.....」

「何言ってるんだよもう、勘弁してくれよお」

「え.....？」

そらちゃんは、思いがけないことを言われて、ドキドキしていました。かけすくんとそらちゃんは、それから終始無言でケーキを食べ、ミントのお茶を飲みました。マダムは相変わらずご機嫌でしたが、今度は黙って二人の様子を見守っていました。そらちゃんは、『かけすくんが、私を好き？ありえない、そんなこと。きっと、かけすくんのお母さんの勘違いだ。だって、私はきれいじゃないし、子供っぽい。私のことなんて、好きになるはずがない』と、自分に言い聞かせていました。かけすくんは、『そらは、店は好きって言っていたけど、オレのことはどう思っているんだろう』と、考えていました。そして二人ともそのことは口に出さずに、アトリを出て、それぞれの家に帰って行きました。

今まで嫌いでも考えたくもないと思っていたかけすくんが、急に気になってしかたなくなったので、そらちゃんは、次の日に、お友達のつばさちゃんに会いに行き、話を聞いてもらうことにしました。

「そんなこと、私はずっと前から気づいていたよ」

つばさちゃんは、笑いながら言いました。

「実は、...私、前にかげすくんに告白したことがあるんだ。でもね、ふられちゃったんだ、好きな子がいるって」

「えー？知らなかったよ、どうして言ってくれなかったの？」

「言えないよ。..だって、かけすくんの好きな子は、そらなんだもん」

「つばさちゃんをふるなんてどうかしてるよ」

「今は、タキくんが好きだし、タキくんもつばさのこと好きだからいいのいいの」

「私のことが好きだなんて信じられない」

「そらは？どうなのかけすくん？」

「いじわるばかり言うから、嫌いだと思ってた」

「思ってた？」

「うん。でも、いじわるしないかけすくんは、嫌いでもない」

「そーらー、かけすくんはね、女の子に素直にやさしくしたりすることが、苦手なの。ついつい余計なこと言っちゃうの。前に言ってた、帰り道でからかわれたことだって、からかうことが目的じゃなかったんだと思うよ。バケモノの噂があったから心配で家まで送ってくれたんでしょ、きっと」

「...そういえば..」

「ほらあ、他にもあるんじゃない、そういうことが。思い出してみなよ。私はかけすくんのそういうところが好きだったんだよねえ」

そらちゃんは、今までのことを思い出していました。

「つばさちゃん、ありがとう。かけすくんが、私のことが好きかどうかを別にしても、私、謝らなくちゃ、かけすくんに。私の方こそいじわるだったかもしれない」

そう言うと、そらちゃんは、慌ててつばさちゃんの家を出ました。パトロール中のかけすくんがいないかと、そこらじゅうを飛びまわりました。ですが、かけすくんは、見つかりませんでした。仕方なく、そらちゃんは家に帰りました。

そらちゃんは、ぬまじいの言葉を思い出していました。そして、かけすくんの言っていたことが毒じゃなかったんだと気がつきました。『他にもたくさんある。工房の先輩の言葉、友達の言葉、お母さんの言葉…。みんな同じ言葉でも言い方や強さが違うんだ。もっとたくさんのお話とお話がしてみたい！』そらちゃんは、そう思うようになっていました。羽の色は相変わらずでしたが、不思議なことに、全然気にならなくなりました。もしもからかわれたとしても、栄養にする自信がそらちゃんにはありました。生きている世界の照明がパッと明るくなったように感じていました。

さて、そらちゃんは、次にかげすくんに会ったときどんなお話をしたのでしょうか？

「かけすくん、あのさ…」

改まって謝るのはなんだかはずかしくて勇気がいります。そらちゃんはなかなか言い出せません。

「な、なんだよ」

「…」

「どうしたんだ？腹でもへったか？」

「…あ、ありがとう」

「ん？」

「私、ずっと気が付かなかったんだけど、いつもやさしくしてくれてありがとう」

「なんだ？今日は感謝の日かなんかか？」

「もー！」

「はっはっはー」

「…そらには兄弟がいないから、かけすくんのこと、お兄さんみたいに思おうと思う」

「兄さん？」

「だって弟、じゃないでしょう」

「それはそうだけど…」

「喜んでくれると思ったのになぁ…」

「……よ、よし、妹、アトリで茶でも飲むか？」

かけすくんは恋人ではなくお兄さんと言われたことが少し残念でしたが、精一杯明るく言いました。

「うん。そら、あのお店大好き」

## とりのせいかつ

<http://p.booklog.jp/book/77424>

著者 : Kevin Spring

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/kevinspring/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/77424>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/77424>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ